『*Depending on myself*』

～道を拓くのは自分自身～』

D班 森崎・岡野・中森・船山

<はじめに>

私達は、二十歳のころに取り組むにあたって「人々の生活に寄り添い生活の一部となっている企業」というテーマを設定しました。学生にとってアルバイトとして働く立場でも、お客さんとして利用する立場でも身近な存在である企業を探し、「心地よい日常を文化にする。」という社是を掲げている株式会社シャノアールの、人事部長である影山光博様に二十歳のころを伺いました。

<株式会社シャノアールについて>

1965年に創業、1986年にセルフサービス型の新業態「カフェ・ベローチェ」をオープン後、「コーヒーハウス・シャノアール」「カフェ・ラ・コルテ」「カフェ・セジュール」の4ブランドを、全国に約200店舗展開しています。日本生産性本部サービス産業生産性協議会が2009年より実施している顧客満足度指数において、カフェ部門で2010年度、2011年度、2013年度に総合1位を獲得しています。また、「シャノアールで働くことについて、あなたは満足していますか？」という、年に一度の社員アンケート調査では、5段階評価で「満足」「概ね満足」と回答した社員が80.3%と非常に高く、会社の風通し、男女平等のキャリアステップ、公休取得率100%、研修の充実など様々な点で高く評価されています。

<インタビュー概要>

まず、「二十歳のころ」について伺う前に、影山様の経歴をお聞きしました。影山様は、福島大学教育学部に入學後、教員を目指し努力していたそうですが、在学中に様々なアルバイトを経験し、多面的な業界に興味を持たれたそうです。その中で、当時からグローバル事業に力を入れていた日本マクドナルド株式会社に入社し、20代はアシスタントマネージャーとして2,3年働き、その後東京で、50人~100人のアルバイトがいる店舗の店長を務めていたそうです。30代では、3年間本場アメリカの店舗に海外研修し、帰国後ハンバーガー

大学の授業を作る仕事に就いたそうです。ハンバーガー大学とは、アメリカのマクドナルドが1961年に創設した人材教育施設であり、ゲームなどを用いた独自のプログラムで、マネジメントやチームビルディング、コミュニケーションスキルなどの教育および教育のシステム開発を行っているそうです。

次に具体的な質問をさせていただきました。最初に、「二十歳の頃に経験してよかったこと」については、サークルやアルバイト、ゼミナールなど大学の授業以外の活動で多くの人々に関わる事で、さまざまな考えや価値観に触れ、仕事について多角的な視点から考えることが出来るようになったとおっしゃっていました。

そして、「仕事をする上で大切にしていること」は、「謙虚さ」つまり、自分の能力に満足せず、何を相手から学ぶかを常に考えること、そして「正当な評価」つまり、キャリアステップの際の明確な評価基準の提示や経営サイドと従業員サイドのバランスの取れた人事を行うことの2つを大切にしているそうです。

最後に、「学生へのアドバイス」については専門的な資格の勉強や、国語（＝コミュニケーション）・算数（＝論理的思考）・英語・情報（＝ITリテラシー）など、社会人になってからでは習得し難い事を、二十歳を含め学生生活の中で学んでおくべきだとおっしゃっていました。

<インタビューを終えて>

今回影山様に「二十歳のころ」のお話を伺い、大切であると感じた事は以下の3点です。

① 謙虚さ・学ぶ姿勢

人とコミュニケーションを取る際、相手から学べることは何かを常に考え、吸収していきたい。また自分以外の人を持つ、多様な角度からの意見や情報を受け入れ、愚痴や文句などマイナスな発言を慎み、現状をよりよくする為にエネルギーを使っていきたい。

② 時間の有効活用

自由な時間、まとまった時間が取れる学生生活で、資格の習得や、国語、算数、英語、情報といった社会で必要な能力を身につけるための勉強、社会人になってからではできない経験をしておきたい。

③ 多くの人との出会い

様々な人との出会いは、自分の価値観や将来への考え方に大きな影響を与えるので、社会人と直接関わる事が出来るアルバイト、主体性をもって活動できるサークルなど、出会いの場を大切に、多くの人と関わり視野を広げていきたい。そして、このゼミで出会った大切な仲間と切磋琢磨し、お互いに刺激し合いながら社会に求められる人材へと成長していきたい。

<最後に>

今回、企業にアポイントを取るために電話をしたり、実際に企業を訪問すること、また4人で協力しレジュメやパワーポイントを作成することなど、普段ではできない様々な経験をすることができました。この「二十歳のころ」で学んだことを忘れず、今後の学生生活、そして社会人になってからも活かせるようにしていきたいです。また、今回このような企画を用意していただいた加藤恭子ゼミナールの方々、そしてインタビューをさせていただいた影山様に感謝したいです。本当にありがとうございました。